ロシア革命後の中央アジアにおける歴史GISを用いた社会経済史研究

植　田　　暁
東京大学大学院人文社会系研究科　博士課程

緒　　言

ソ連崩壊後、海外の研究者にも膨大な歴史史料へのアクセスが容易になり、旧ソ連地域の歴史学研究は世界的に活発化している。従来のイデオロギー的な枠を超えて、旧ソ連地域の社会経済史を新たな視点から実証的に再検討することが、学会における中心的な課題の一つである。新たに利用が可能になった史料は膨大であり、伝統的な歴史学の分析方法のみではそこに含まれる豊かな情報を十分に利用することは困難である。本研究では、地理情報システム（GIS）を活用し、中央アジア最大級のオアシスであるフェルガナ地方の社会経済史の復元を試みた。GISとは地理情報を分析するためのコンピューターソフトウェアの総称であり、地理情報を媒介として統計データや記述データを統合し、分析するための手法である。人文学分野においても徐々に利用が広がり、その可能性は注目を集めている。本研究は主としてロシア革命後の内戦期（1917～1930年頃）における綿花モノカルチャーの復興と世帯構成人数の変化を中心とした人口学的問題に焦点を当て、現在に繋がる中央アジアの社会構造の形成を検討する。

方　　法

2014年7月16日から2015年3月24日までウズベキスタン共和国の首都タシケントを拠点に文献調査に従事した。共和国科学アカデミー歴史学研究所に在籍し、主として共和国中央文書館（TsGA RUz）において、トルキスタンソビエト社会主義自治共和国人民委員会議綿花委員会、ウズベクソビエト社会主義共和国ゴスプランなどに関する文書群から多くの有用な情報を得た。その他、国立ナボイー図書館、フェルガナ州文書館などにおいて文献調査を実施した。現地調査の期間中、現代およびソ連期の中央アジアに関する地図類、ウズベキスタン経済に関する統計資料集等の貴重な資料を蒐集した。また、2014年8月にウズベキスタン西部のカラカルパクスタン自治共和国に赴き、カラカルパクスタン国立大学の研究者からソ連期以降のアラル海における自然・人文環境の変化に関して情報を得、関連資料を蒐集した。

結果と考察

1.　ロシア革命前後のフェルガナ地方の農業に関する比較

1924年、中央アジアでは民族別境界画定が行われ、従来の地理的行政区分が一新された。新たな国境線は旧フェルガナ州内の郡境界とはまったく異なり、1924年前後の統計情報の比較は困難である。本研究ではGISを利用し、フェルガナ地方内部の農業作付比率の変化の復元を試みた。ロシア帝国期に関して、1890年から1904年にかけて実施された土地税に関する調査データを利用した[i]。ソビエト政権期に関しては1929年のデータを利用したが、本データがカバーしているのはウズベキスタン領のみである。両データをベースマップ上にポイントとしてプロットし、ボロノイ分割によって面的に区分したものが図1aである。

ロシア革命後の内戦の影響で、フェルガナ地方の綿花栽培は1922年にはほとんど壊滅状態となり、総作付面積に占める割合は5%程度にまで落ちた。図1aから1929年の総播種面積に占める綿作の割合は、革命以前をはるかに凌駕していたことが読み取れる。綿、米、小麦の主要三作物の作付比率を比較した図1bからは、アンディジャン市以東のフェルガナ盆地東部において1900年ごろには稲作が優越していたのに対して、1929年には綿作が圧倒的に優越となったことが観察できる。盆地東部の気候はやや冷涼であり、西部に比べると綿作に不向きな自然条件である。原綿の移出手段である鉄道は西部のフジャンド渓谷からフェルガナ盆地に入り盆地

[i] 土地税課税のための測量調査は，アンディジャン郡では1890～1893年，マルゲラン郡では1894～1896年，コーカンド郡では1899～1902年，オシュ郡では1903～1904年，ナマンガン郡では1897～1899年に実施された．

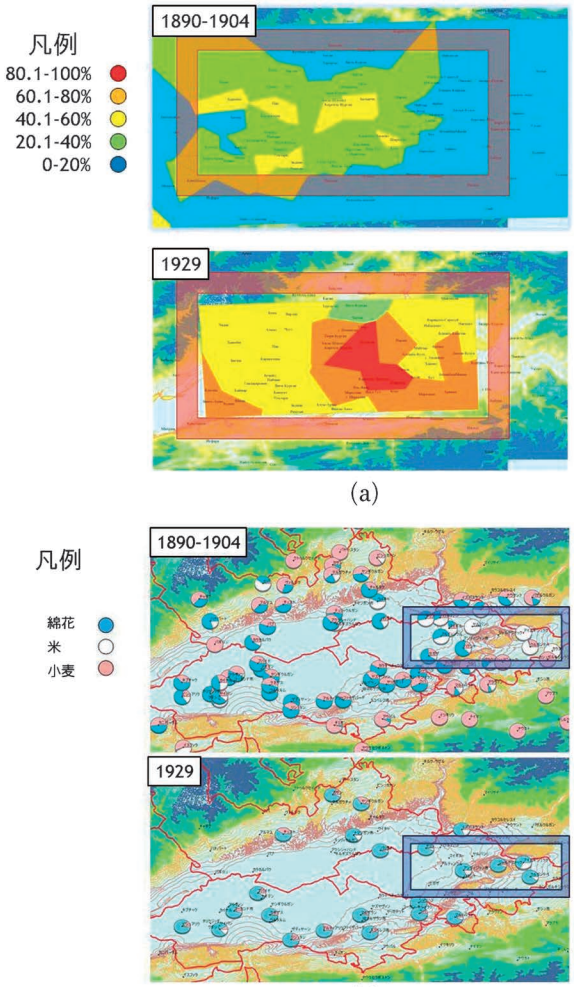

図1　a.　1900年ごろ（1890〜1904）と1929年の綿花作付比率（ボロノイ図）。b.　1900年ごろ（1890〜1904）と1929年の綿、米、小麦の作付比率（円グラフ図）

出典　*Материалы для Статистического Описания Ферганской области*, *Результаты Поземельно-Податных Работ*, 1897–1912, *Районы УзССР в цифрах*, 1930: 116–123.

西部の主要都市を結んだが、盆地東部のアンディジャン市に鉄路が至ったのは漸く1916年になってからであった[1)ii]。すなわち、盆地東部における綿作はフェルガナ盆地内で比較劣位であったにもかかわらず、内戦後の1929年までに東部にも綿花モノカルチャーが浸透したのである。その他の地区においても1929年までに軒並み綿作の比率が増加し、小麦と米の作付比率が激減していることが、図1aおよび図1bから明らかとなった。ソビエト政権が現地農村の組織化や綿花地域への食糧供給などの様々な施策によって綿作の復興に努めたことが、フェルガナ地方における急速な綿花作付面積の復興に繋がったと考えられる。

ii　TsGA RUz F. R-215, «Управление Водного Хозяйства при Наркомземе ТуркАССР» 1918–1924. op. 1, d. 330, «Протоколы, Копия Предписания Начальнику Ферганского Областного Отдела Водхоза об Обследовании Станции Машинного Орошения» 1923–1924. l. 30.

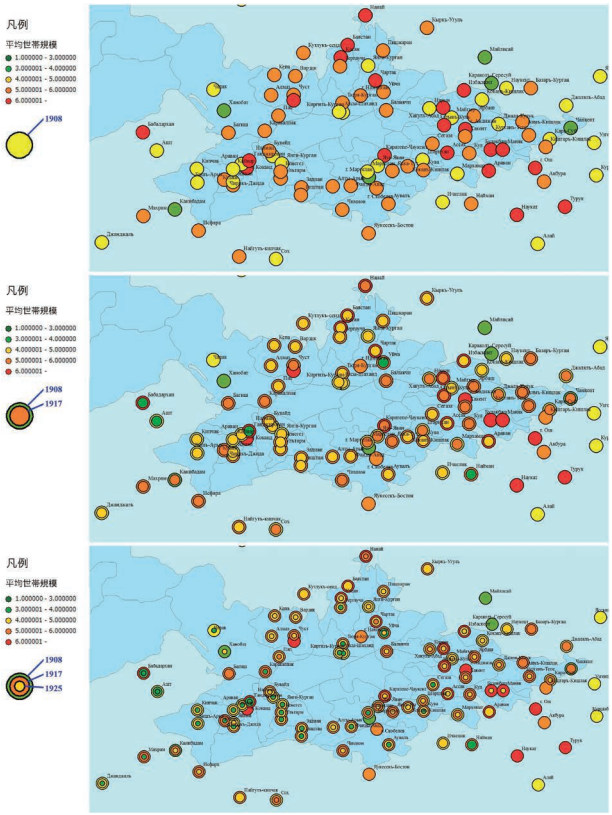

図2　フェルガナ州における郷別平均世帯規模（1908年、1917年、1925年）

出典　*Список населенных мест Ферганской области*. 1909, *Материалы всероссийских переписей в Туркестанской республике*, *вып*. 4, *Сельское население Ферганской области по переписи* 1917 *г*., *Список населенных мест Узбекской ССР и Таджикской АССР*, *вып*. 3, *Ферганская область*, 1925.

2.　内戦期における世帯規模の変化とエスニシティー集団

ロシア革命後の内戦は旧ソ連地域の広い範囲において、地域社会に大きな爪あとを残した。中央アジアの中でも、フェルガナ地方は東ブハラ地方、トルクメン地域と並んで、最も戦乱が激しかった地域である。フェルガナ地方が革命の前後を通じて中央アジア経済の中心であったことを考慮すれば、内戦がフェルガナ社会にどのような影響を及ぼしたのかを明らかにすることの意義は大きい。また、フェルガナ地方は中央アジアの中でもとくに様々なエスニシティー集団が混住している地域であ

り、エスニシティーに注目して内戦期の社会変動を分析することが有効である。すでに別稿において、内戦期のフェルガナ地方の人口減少とその地域的特性については若干分析を加えた[2)]。本研究では、世帯規模の変化等に関して分析を実施した。零細な小農経営が大半であったフェルガナ地方において、世帯規模の変化は農業経営と人口再生産を規定する最重要の指標である。

図2はフェルガナ地方内の郷ごとの平均世帯規模を1908年、1917年、1925年について図示したものである。1908年の段階で注目すべき傾向は、平均世帯規模が6人以上の地域が主に東部と北部に分布していることである。とくに東部のアンディジャン市以東とシル川以北、ナナイ渓谷にかけての地区に平均世帯規模6人以上の郷が集中している。南西部における平均世帯規模は、中心都市コーカンドを例外として、北部と東部よりも一般に小さかった。平均世帯規模の分布を図1の作付の分布と比較すると、主要な綿作地帯であった南西部において世帯規模が小さい傾向にあったことが明らかとなる。

1908年から1917年までの期間に世帯規模の比較的大きかった北部と東部の平均世帯規模が縮小し、平均世帯規模6人以上の郷の数は減少した。この要因としては、これらの地方にまで綿花生産が拡大し、農業生産の形態が変化した可能性、1916年の反乱による影響などが考えられるが、詳細な検討は今後の課題とする。1917年から1925年の期間の世帯規模の縮小はさらに劇的である。南西部のソフ川扇状地では多くの郷で平均世帯規模

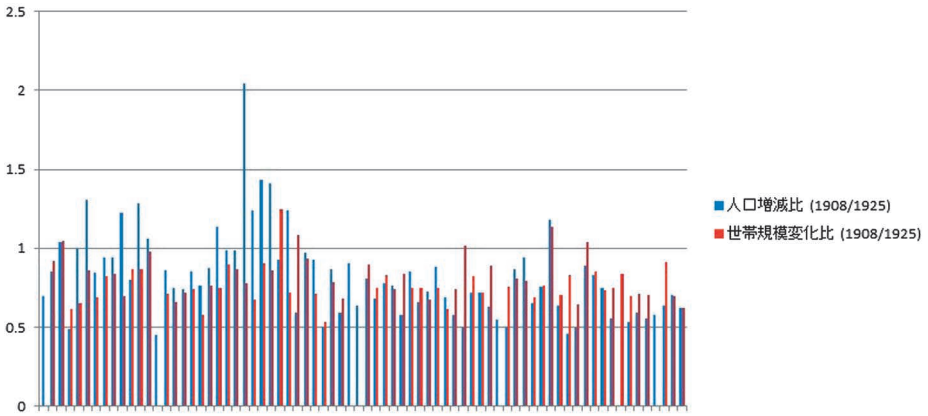

図3　人口増減と世帯規模の変化

出典　*Список населенных мест Ферганской области*. 1909., *Список населенных мест Узбекской ССР и Таджикской АССР, вып*. 3, *Ферганская область*. 1925.

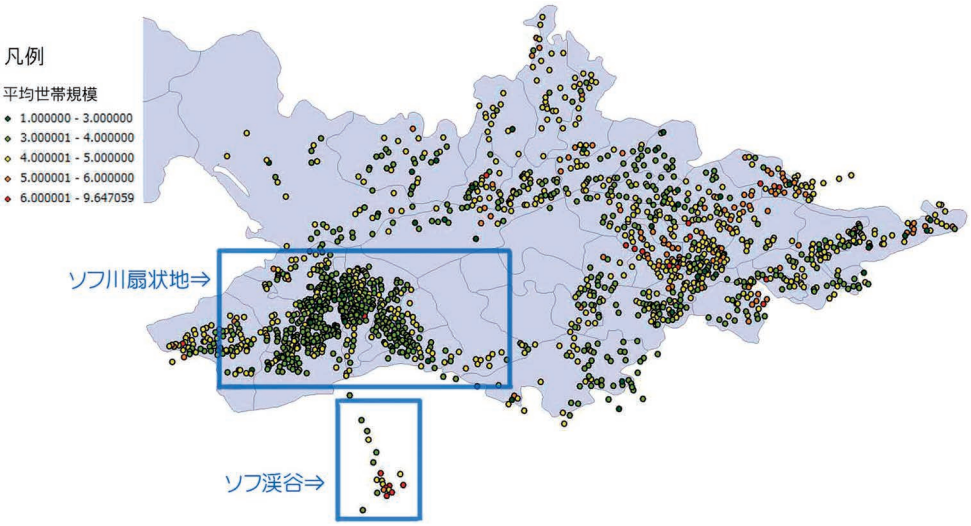

図4　1926年のフェルガナ州における集落別世帯規模

出典　Inagamov 1948.

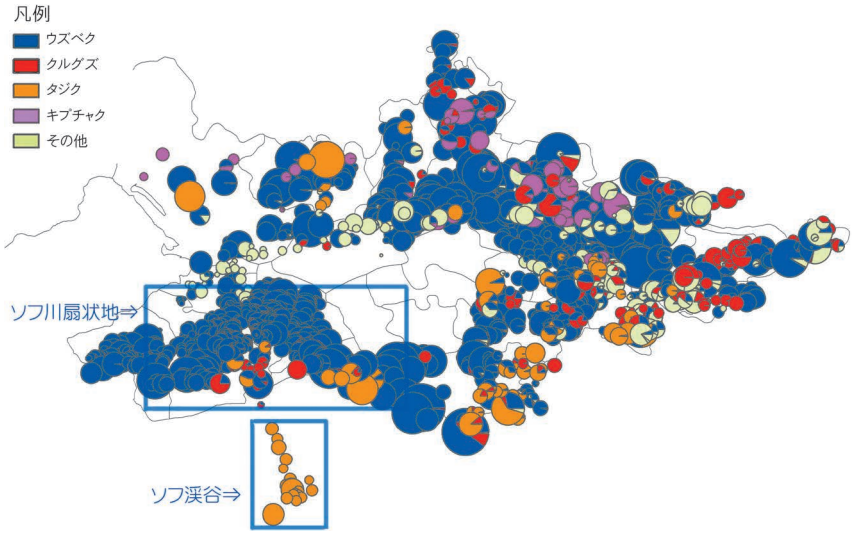

図5　1926年のフェルガナ州における集落人口とエスニシティー

出典　Inagamov 1948.

が4人を下回った。この急激な変化は、1923年をピークとしてフェルガナ地方を荒廃させた内戦と飢餓の影響であると考えられる。

図3のグラフは、1908年から1925年の世帯規模変化と人口増減のいずれかが判明する74の郷のデータである。グラフから、内戦中の1925年に戦前より人口が増大していた郷が一定数確認できる。これらの郷はフェルガナ州の周縁部に分布し、新疆やサマルカンド地方へ通じる主要交通路上に位置する。難民の移動経路上に位置したこれらの郷ではフェルガナ地方内の他の郷から避難民が流入することによって、人口が増大したと考えられる。しかし、人口が増大した郷においても一般に世帯規模は縮小している。内戦期の世帯規模の縮小は人口現象よりもさらに広汎な現象であったことがわかる。

つぎに、内戦期の世帯規模の縮小とエスニシティーの相関性を見てみよう。図4および図5は1926年の集落ごとの平均世帯規模（図4）とエスニシティーの人口分布（図5）である。世帯規模の縮小が顕著であったソフ川扇状地では住民のほとんどが、ウズベクであった。一方、上流のソフ渓谷の集落では世帯規模は比較的高めに維持されたが、それらの集落の住民はペルシア系のタジクであった。

要　　約

本研究は、中央アジア最大のオアシスのひとつであるフェルガナ地方に関して、GISを利用してロシア革命前後の社会経済状況の比較を実施した。農業作付の分析からソビエト政権初期における綿作の急速な復興を示し、フェルガナ地方内の地域差とその要因について分析を加えた。世帯規模の変化に関する人口学的分析では、綿花地帯における20世紀初頭の世帯規模の小ささとフェルガナ地方全体で観察された内戦期の世帯規模の縮小を示した。郷・村落レベルのGIS分析によって、一部の集団が世帯規模縮小の影響をほとんど蒙らなかったことなど、フェルガナ地方内の多様性を明らかにした。これらの状況を導いた個々の要因を記述史料の分析によってより詳細に解明する研究を平行して実施しており、今後順次その成果を発表していく予定である。

謝　　辞

本研究の遂行にあたり、平成26年度学術研究奨励金のご支援を賜りました公益財団法人三島海雲記念財団に厚く御礼申し上げます。

文　　献

1) TsGA RUz F. R-215, «Управление Водного Хозяйства при Наркомземе ТуркАССР» 1918–1924. op. 1, d. 330, «Протоколы, Копия Предписания Начальнику Ферганского Областного Отдела Водхоза об Обследовании Станции Машинного Орошения» 1923–1924. l. 30.
2) Ueda, A. Journal of Asian Network for GIS-based Historical Studies, 2, pp. 22–31., 2014.

史　　料

1) Инагамов, Ш. Ш. *Этнический состав населения и этнографическая карта Ферганской долины в границах Узбекской ССР*. Ташкент, 1948.

2) *Материалы всероссийских переписей в Туркестанской республике, вып*. 4, *Сельское население Ферганской области по переписи 1917 г*. Ташкент, 1924.
3) *Материалы для Статистического Описания Ферганской области, Результаты Поземельно–Податных Работ*. Нов. Маргелан и Скобелев, 1897–1912.
4) *Районы УзССР в цифрах*. Самарканд, 1930.
5) *Список населенных мест Ферганской области*. Скобелев, 1909.
6) *Список населенных мест Узбекской ССР и Таджикской АССР, вып*. 3, *Ферганская область*. Самарканд, 1925.